

冬場の子牛の管理について

冬場は子牛のトラブルが発生しやすく、斃死事故につながることもあります。事故を未然に防ぐためにも、寒くなる冬に向けて子牛の管理を再確認したいと思います。

○なぜ子牛は寒さに弱いのか

- ・子牛は親牛に比べて皮下脂肪が少ない
- ・体重が小さい割に体表面積が広く、体表面からの熱発散が多い
- ・第一胃が未発達で、熱発生が少ない（第一胃では醗酵による熱で約 40℃と温かい）

○初乳の給与

冬場に限らず、子牛が生まれたら行わなければならない大事なことです。免疫グロブリンの吸収能力は時間とともに低下するため、出生後 6 時間以内に与えることが重要です。子牛が自ら飲むに越したことはありません。生後 6 時間までは哺乳欲を示すまで様子を見てください。哺乳欲を示さない場合は、カテーテルによる強制投与を行ってください。この時、誤嚥を起こす可能性があるため注意が必要です。

初乳の免疫含量は母牛ごとの個体差が大きいため、初産の子牛や虚弱気味の子牛、ET 和牛子牛には初乳製剤を与えると良いでしょう。また、給与量が多いほど摂取できる免疫の量も当然多くなるため、少量ずつでも回数を増やすなどの工夫が必要です。

○代用乳の給与

代用乳を飲ませる時の温度は、親牛の体温（39~40℃）くらいが理想です。溶かす温度は概ね 45~55℃くらいが推奨されますが、冬場は高めの温度で溶かすと良いでしょう。ただし、60℃を超えると蛋白質の変性や乳酸菌等の菌数減少が起こるため注意が必要

です。また、冬場は体温維持のため給与量を 1 割増やすようにしましょう。

○人工乳（スターター）の給与=飲水量の確保

十分量のスターターを食べさせるには飲水が重要です。カーフハッチなどで飲水が凍らないよう注意し、夏場より給水回数を増やし温水を与えるなどの工夫が必要です。

○換気・風対策

冬場は牛舎を閉め切りがちになり、アンモニアにより抵抗力が低下し、肺炎を発症する可能性が高くなります。子牛の頭の位置までしゃがみ、目や鼻にツンとくるようなアンモニアが溜まっていると言えますので、十分な換気を心掛けましょう。

また、子牛に直接風が当たると体温を奪われます。カーフカッチで飼養する場合、北風を避け日光を入れるために入口を南側にすると良いでしょう。舎内で飼養する場合も、すき間風や、換気時に風が当たらないように風よけをするなどの対策が必要です。

○保温

体が濡れていると子牛は急速に体温を奪われます。敷料の交換頻度を高め、敷料を増やすなどの対策が必要です。虚弱気味の牛にはカーフジャケットを着せるのも良いでしょう。分娩直後は特に注意が必要です。乾燥した敷料をたっぷり敷き、場合によってはヒーター等で保温をしましょう。



(田中)